

富士山写真大賞展

富士山をこよなく愛する写真家からはもとより、回を重ねるごとに新たな方々からの応募者数も増え、フォトコンテストとしての地位を揺ぎない領域にと広げた富士山写真大賞。その最大の魅力は、入賞を果たした作品が最高級のフリントで全倍サイズに引き伸ばされ河口湖美術館に展示されるという他のフォトコンテストにはない特徴であり、さらに実施回数 20 回までの全ての入賞作品はきちんと装丁梱包され、美術館本来の貴重な芸術作品と同じ扱いで館内に保存され、再度美術館を訪れる方々に改めて鑑賞できるチャンスも年間通じて行われています。美術館に収納されている絵画やその他一品芸術としての貴重品と比べて写真作品は通常複製芸術として上から目線で冷ややかに見られがちですが、このような扱いをしてコンテストを担当している学芸員はじめスタッフの方々に心から深い敬意と感謝を申し上げます。

さて、それでは第21回富士山写真大賞に触れていきます。

すでに多くの方々がご存じのように、当コンテストの主役は富士山そのものですが、作品募集の応募要項を読むと富士山の他に全国各地に点在する〇〇富士や富士塚、さらに富士山を連想させるものなど、どのような作品でも歓迎するという度量の広い作品募集であり、これが大いに受け、回を重ねても応募作品が減る兆しはなく、むしろさらに新しい方々も増え始めているという状況が今回特に感じられました。応募者数は450名、応募点数は1,468点と増加して居り、年少者から高齢者までの層もさらに広がって居ります。

応募点数が増えたことにより作画内容の幅が広がって、その中から入賞作を50点に絞り込むという作業はかなりの労力と困難さがつきまわって来ますが、この苦痛が選者にとっては嬉しさ、ありがたさとも言え、選者の三宅修氏と私は、応募作品が並べられた長いテーブルを何度も行きつ戻りつ根限り集中し選考を重ねていきます。二人共若い時から日本中の山野を歩き廻り写し続けてきた身柄、今でも体力には自信があるのですが、選考中のテーブルの長さには、まいったーと感ずることがあります。それでも応募された皆さんはこのコンテストに入賞しようと撮影現場に何度も通い、これぞと思う作品を送ってくれたのだと考えると、二人共手を抜くことはありません。

その結果、選考された作品は独自の閃光を放っております。尚、入賞枠から漏れてしまった数々の作品のなかには入賞作に劣らぬ作品が何点も存在して居りましたがその辺り誤解のないように説明しますと、選考から外れた作品は、21回と回数を重ねてきた中で既に類似の作品が入賞している事が主な要因の一つ、さらに今回入賞枠に入った作品と見比べたときにシャッターチャンスや画面構成、フリント仕上げの優劣等、微妙な所で幸運を逃してしまった方々が多く見受けられました。その点はとても残念だとは思いますが、三宅さん共々よく話し合っただけでござ承のほどよろしくお願い致します。

では入賞作品について触れていきます。

応募点数1,468点の中から最高賞の金賞を射止めたのは門脇秀一さんの作品「魚彩雲」でした。富士天空に出現した虹色に染まる摩訶不思議な形態の雲、門脇さんがタイトルとした「魚彩雲」が天下をゆっくりと泳ぎつつ下方の富士山を見学しているような不思議な形態とファンタスティックな色彩が画面に満ち溢れていて独特な精彩を放って印象深いこの作品が最高賞を射止めました。

準最高賞銀賞には加藤利忠さんの「閃光富士山」が選ばれました。ダークグレーの暗調のシーンの中で背後に稲妻閃光なびく雲間、ドラマチックな一瞬の光景、幾度このチャンスが訪れたのか、微妙なシーンを見事に写し止めています。最高賞の門脇さんの作品と最後まで争った優れた印象的な作品です。

さらに第三位の銅賞に輝いたのは竹村幸和さんの作品「月光の湖畔」でした。この作品も前述二者の作品に劣らず精彩を放つ作品です。富士山上空とその周囲を取り巻く雲の存在、雲間に透けて昇る月など画面全体に滲む得もいぬ雰囲気や漂った味わい深い作品です。温かいコーヒーを飲みながらシャッターを押す、おっとそんな余裕はないですね。一瞬のシーンの中での出会いと集中は写真を写す人にしかわからない貴重なひととき、作者の竹村さんから人柄までも感じとれる気がいたします。

この原稿を書き続けている今朝、私が住む北海道摩周湖と屈斜路湖そして硫黄山が前にある川湯駅前には早朝玄関の温度計はマイナス17度まで下がっています(11月29日AM6時)。温かいコーヒーを飲みながら書く原稿、シャッターチャンスの一瞬より少しは余裕があるので第三位入賞のところで竹村さんの作品に触れた時ついコーヒーを飲みながら写したらなどと書いてしまいました。どうか悪しからず。

上位入賞の三点はいずれも富士山とその周辺に出現した雲の形態や太陽と云う一灯ライティングの射し込む効果によって印象的な作品を写しとっていますが、このような作品は他にはこれだと思えるものも多数ありました。第四位優秀賞「天女の羽衣」檀林正浩さん、第四位優秀賞「湖畔に沈む日」石井邦彦さん、第五位入選「妖雲とダイヤモンド富士」小俣亮太さん、第五位入選「陽光に染まる」井出吾朗さん、第五位入選「朝日輝く」天野喜夫さん、第五位入選「霊峰の神秘」宮崎泰一さん、第五位入選「真夜中のドラマ」小山幹男さん、第五位入選「彩雲」金本文明さん、第五位入選「神々しい光」猿田路代さん、第五位入選「珍榛名富士の朝」青海正光さん、第五位入選「嵐が去って」上野祐司さん、第五位入選「春の朝」八子俊昇さん、など、どの作品も山頂周辺にかかるさまざまな表情の雲の形態や太陽光から生じる色彩の変化を巧みに狙い、写しとった力作が数多く入選しております。これらの作品は写しに行けばいつでも写せると云うものではなく、何度も通いつめようやく写し止めた方が多かつたのではないかと推察されます。通いつめる事の大変さと辛さ、そうしてようやくチャンスに恵まれ、写しとった時の喜びと安堵、他のどの芸術の分野でも味わう事が出来ない写真の面白さと奥深さが滲み出ます。

たった一枚の作品に富士山の魅力を巧みに写し止めた前述の作品群の他にも、入賞したすばらしい作品がまだあります。陽が沈み暗黒の中でごめく光を巧みに捉えた第五位入選「雲海の彩り」沼中秀夫さん、第五位入選「地球は回る」藤井義智さんの長時間露光の作品、第五位入選「星降る宵に笠」稗田裕文さんの夜景、さらに第五位入選「栗名月を乗せて」鈴木克哉さんの思い切ったカットで山頂付近と月を捉え、目を引く作品に仕上げた力量に20代男性の熱き思いが感じとれます。

このような味わいの作品とは又違う捉え方で印象的な作品を最後に書き添えます。

第四位優秀賞「和の調べ天空に響け」筑木親久さんの作品は吹く笛の音は天にも富士にも、又、この作品の前に佇む人にも響きわたるような雰囲気が漂っています。又、第四位優秀賞茂木由美子さんの「厳寒の朝」、第五位入選「雪稜の彼方」島田穰さん、第五位入選「千貫門の夜明け」鈴木泰信さん、第五位入選「波濤立石」薬師郁男さん、の方々の作品は富士山を遙か彼方に捉えながら画面前景に見応えにあるすばらしい光景を配置して魅力ある作品です。空撮で富士山を上空から見下ろした第五位入選「高度6000メートル」岡久敏明さんの雲海上にその雄姿を天空に突き上げる作品と第五位入選「巨大な火口ぐち」鈴木孝晴さんの上空から富士山そのものにズバッと切り写し止めた壮大な作品です。

入賞作品にはこの他にも四季折々の季節の中で捉えた作品が何枚もあるのですがその全てに触れることはさまざまな困難が生じます。入賞された方々には大変失礼を思われますがぜひ河口湖美術館に展示された額入り全倍判のご自身の作品に触れゆくりご鑑賞下さい。その出来栄は、本人はもとより身内の方や友人、知人の方をお連れして鑑賞しても、「オーっ、すばらしいなあー、素敵だー」と楽しく和やかな時間に浸る事が出来るものと確信して居ります。

尚、日本各地のふるさと富士を被写体とした作品のうち入賞は三点ありました。阿寒富士を写した高橋和幸さんと、榛名湖を写した青海正光さん、竹本ひろ子さんの三名でした。応募要項で富士と名のつく山々ならOKという幅の広いこのコンテスト、全国のこれらの富士山も四季折々の移ろいの中でフォトジェニックなチャンスに恵まれれば素敵な作品が生まれるはずです。その為には通いつめる事の大切さを、身をもって感じとることです。富士山を写して入賞されるベテランの方々はそうした努力をけっして惜しみません。その時心に残る作品が生まれてくるのです。

当コンテストは21年間という年月を重ね、応募される方々は超ベテランから比較的キャリアの浅い方、年少者や高齢の方々、女性の方々の応募もさらに増えて居ります。このように長い間人気を保っているのは前述したように「富士山」に関わるあらゆる内容の被写体であれば全国どこの山でもOK、そして入賞した作品全てが全倍でフリントされて三ヶ月間展示されるという寛大で魅力に富んだコンテストであると言う事が大きな要因となっています。

主催者である河口湖美術館、富士河口湖町、第1回目からこのコンテストの運営の窓口となって雑務から展示オープンまで苦勞されている河口湖美術館の方々に深く感謝申し上げます。

それではこれからの皆様のさらなるご活躍を期待して第21回富士山写真大賞の総評の筆を置きます。

横山宏 (審査員 写真家 1939年生まれ)

